校長室だより～燦燦～ №６０９

トーク＆チョーク

2022.8.22

毎月、F-Labo に参加している。F-Labo とは、rst-labo ふくしまの通称である。リーディングスキルの勉強会である。７月には、高校の先生の発表があった。お二方とも県内有数の進学校の先生だった。普段見ているリーディングスキルテストの結果とはまるで違う結果を見た。リーディングスキルテストと学力には相関関係がある。うなずける。

日本史の先生の発表が印象的だった。「教科書は、ただ読んだだけでは理解できないように作られている」という第一人者のお話から、「教科書の読解を通じて、生徒の思考力を養う」というご自身の方向性が間違っていなかったと自信をもつことができたそうである。

教科書を読んで分かったような気持ちになっている生徒の知識理解を打ち砕き、本当に理解しているのかと生徒を揺らして思考力を高めていくことがご自分の授業スタイルだという。このスタイルを実際に模擬授業としてやってくださった。

見事だった。これだと思った。トーク＆チョークという言葉がある。講義形式の授業を揶揄したものである。黒板に板書をしながら解説や説明が中心となる授業である。アクティブラーニングの登場とともに、ここ数年で変わってはきたが大学や高校ではまだまだ多く見られる授業形態である。

以前、勤務していた場所が、福島県の先生方が研修をするところだった。私の担当は小学校と中学校だったのだが、お手伝いと称して高校の研修にも参加していた。そこで、高校の先生方の模擬授業をたくさん見た。

そのほとんどは、トーク＆チョーク＆ワークだった。まるで決められたかのようにワークシートを使う。だが、基本的に解説型、説明型の授業だった。その場で、若手の先生方にトーク＆チョーク＆ワークという言葉を教えた。生徒に考えさせない授業、生徒指名型の授業、生徒に話させない書かせない授業では、いったいどんな力がつくのかという話をした。定期テストの問題は解けるかもしれないが、それだけである。

トーク＆チョークを完全に否定しているわけではないということも話した。この形でいくならば、もっとトークを磨いてほしい。それを支えるのが専門性である。高校の先生に期待するのは専門性なのである。現時点では、皆さんのトークはつまらない、おもしろくない。名人芸のようなトークを展開してほしい。このようなことを話したので、かなり印象には残っているはずである。

F-Labo に参加して名人芸のような日本史の先生のトークに出合うことができた。話を聞いていると、「なるほど、そういうことか」と歴史の一コマ、一コマが腑に落ちるのである。脳みそが働く。先生は黒板に殴り書きのような文字で板書をしながら説明していく。この板書が実は構造的でわかりやすい。

先生の話を聞いて理解した後に教科書を読む。理解度がまるで違う。それまでは、何となく分かったような気になっていた。それが、本当に分かったように思えてくる。この授業では、穴埋め式のワークシートなど必要ない。ノートで十分である。ノートがいい。

これが、専門性に裏打ちされた高校の授業である。かなりの知識と教材研究がなければできない授業である。生徒を揺らす、揺さぶる手法も見事である。これは社会科だが、国語でも、このような授業がしたい。

この日本史の先生に教えてもらった。進学校の生徒でも、薩摩藩が鹿児島県だと分からない。長州藩が山口県ということはもっと分からないという。テストに出るものには強いが、それ以外の知識は弱い。大学進学を目指す進学校の高校生である。考えてしまう。中学校にも責任があるだろう。きっとほとんどの高校生が、薩摩と長州のことが分からないのかもしれない。

今回の日本史の先生の他にも、トーク＆チョークで勝負できる先生はいるはずである。だが少ないと思われる。多くの先生は、自分のトークに疑問を感じないまま、一生懸命しゃべっている。目の前の生徒の表情や様子を見れば、自分のトークのレベルはすぐに分かる。トークがだめならば、ＩＣＴを活用した方がよい。生徒に話し合わせた方がよい。時代は変われども、名人芸の日本史の先生には、ずっとトーク＆チョークを続けてほしい。その方が生徒のためである。